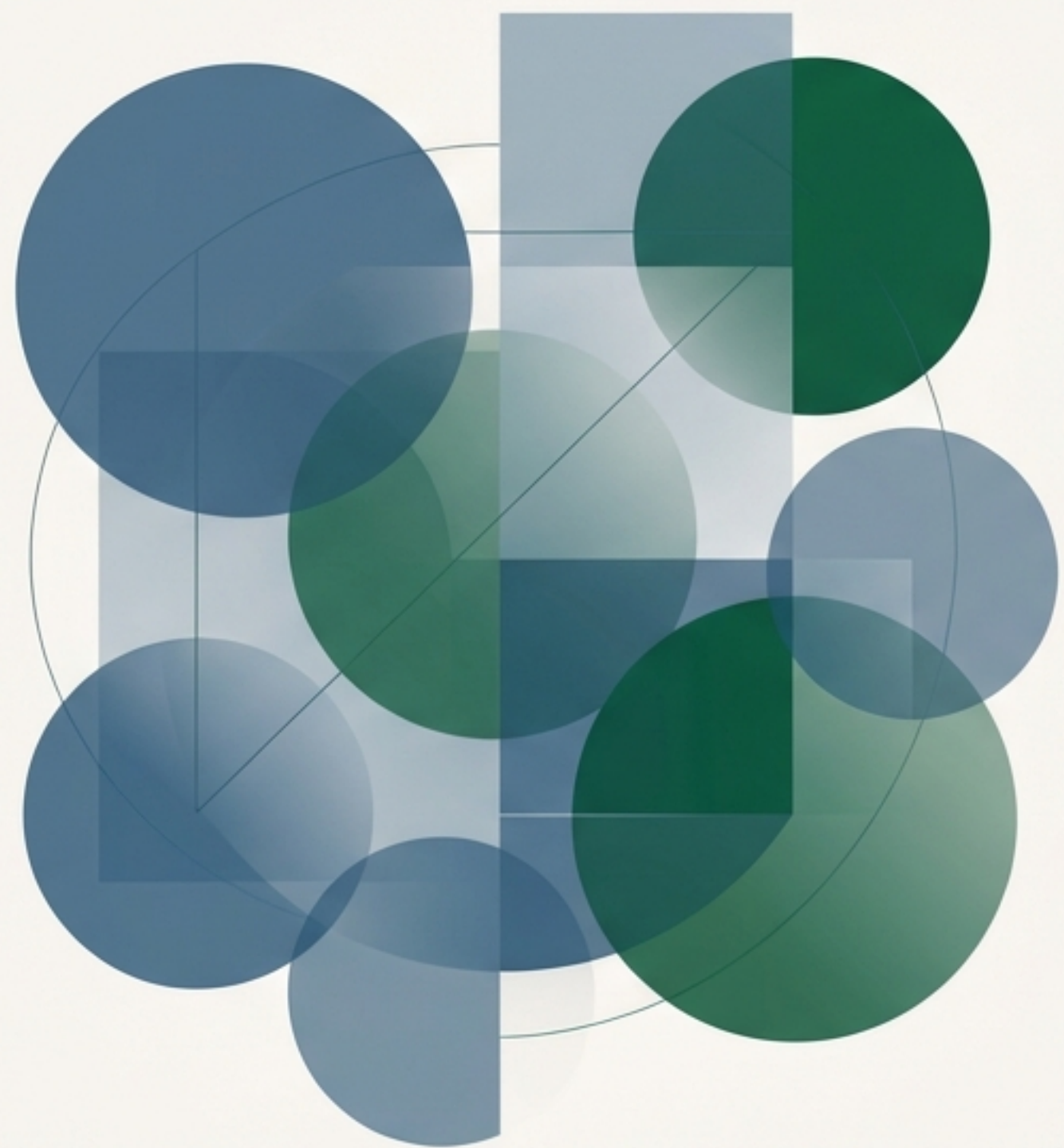


特別支援学校学習指導要領「自立活動編」 解説：一人ひとりが輝く未来のために

新しい時代に求められる「生きる力」を育む、自立活動の理念と実践





なぜ今、改訂なのか？（The WHY）

未来社会を切り拓くために：予測困難な時代における教育の新たな使命

- * 私たちが向き合う社会は、グローバル化、技術革新（AIの進化など）により、構造が大きく急速に変化し、「予測が困難な時代」となっています。
- * このような時代にあって、学校教育の役割は、単なる知識の伝達ではなく、子供たちが変化に積極的に向き合い、他者と協働して課題を解決し、新たな価値を創造する資質・能力を育むことにあります。
- * このことは、障害のある子供たちにとっても例外ではありません。

「子供たちが未来社会を切り拓くための資質・能力を一層確実に育成することを目指す」（出典: まえがき）

なぜ今、改訂なのか？ (The WHY)

教育の北極星：「生きる力」を育む

この時代の要請に応えるため、新しい学習指導要領は「生きる力」の育成を改めて中核に据えています。この力は、以下の「三つの柱」で具体化されます。

知識及び技能

説明: What you understand, what you can do

(生きて働く知識・技能の習得)

思考力・判断力・表現力等

説明: How to use what you understand and what you can do

(未知の状況にも対応できる力の育成)

学びに向かう力・人間性等

説明: How to engage with society and the world, and lead a better life

(学びを人生や社会に生かそうとする力の涵養)

なぜ今、改訂なのか？（The WHY）

特別支援教育の核：自立と社会参加を目指して

障害のある子供たちにとって、「生きる力」は「**自立と社会参加**」という究極の目標を通じて実現されます。

これは、学校教育法第72条に定められた特別支援学校の目的であり、私たちの全ての教育活動の原点です。

障害のある者となない者とが共に学ぶ「インクルーシブ教育システム」の構築は、この目標を達成するための重要な理念です。

「障害による学習上又は生活上の困難を克服し自立を図るために必要な知識技能を授けることを目的とする。」（学校教育法第72条）



どうやって実現するのか？（The HOW）

障害の捉方の進化：医学モデルから生活機能モデルへ

私たちの指導の根底には、障害に対する考え方の大きな変化があります。



旧来の考え方 - ICIDH

国際障害分類（ICIDH）

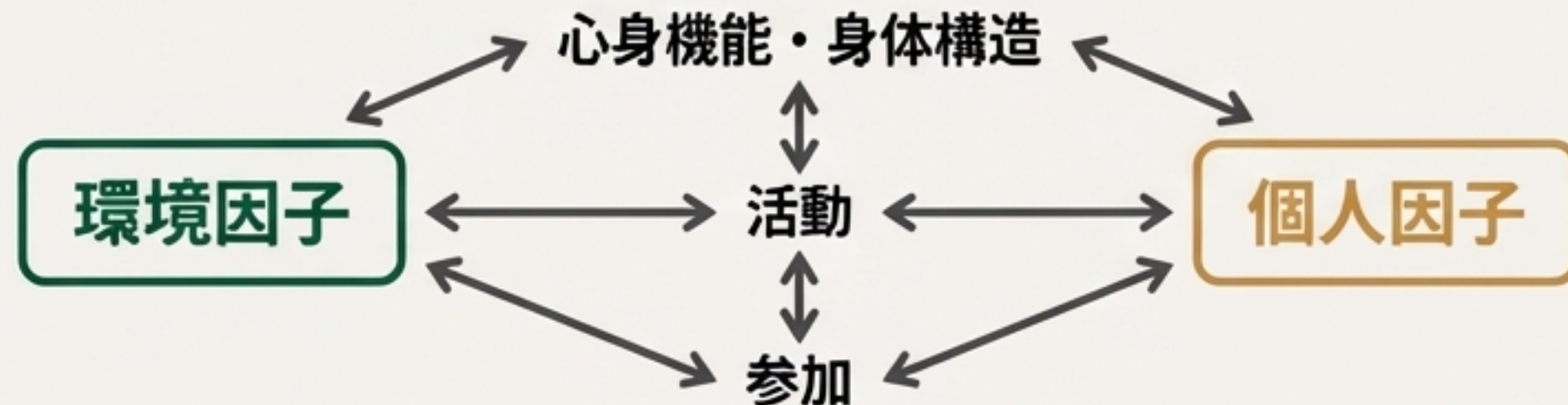
疾病等に基づく個人のマイナス面
（機能障害、能力障害）
欠損、困難



現在の考え方 - ICF

国際生活機能分類（ICF）

人間の生活機能全体（心身機能、活動、参加）
と、それを取り巻く**環境因子**との相互作用
生活機能、参加、環境



結論: 障害は個人だけの問題ではなく、環境との相互作用の中で生じるもの。この視点が、自立活動の指導の基盤となります。

どうやって実現するのか？（The HOW）

「自立活動」とは何か？

自立活動は、特定の教科ではなく、障害のある幼児児童生徒一人ひとりのための特別な指導領域です。

＊ 主たる対象：「障害による学習上又は生活上の困難」

＊ 目指すもの：困難を主体的に改善・克服し、
「心身の調和的発達の基盤を培う」こと

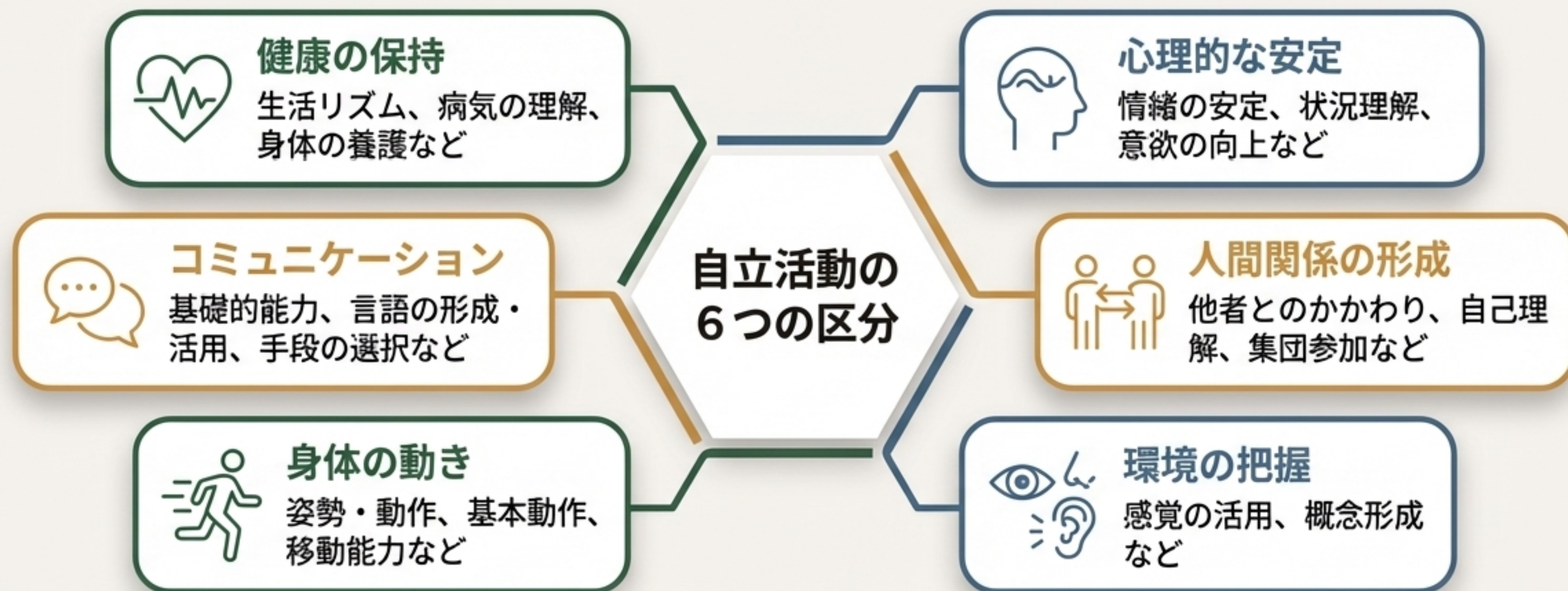
結論：自立活動は、全ての学習の土台を築き、各教科等で育まれる資質・能力を支える役割を担っています。



どうやって実現するのか？ (The HOW)

自立活動の全体像：6つの区分

自立活動の指導内容は、子供たちの心身の発達を多面的に捉える、相互に関連した6つの区分で構成されています。



注記: 個別の指導計画を作成する際は、これらの区分から必要な項目を選び、相互に関連付けて指導内容を設定します。

どうやって実現するのか？ (The HOW)

改訂の要点：子供自身が主体的に環境を調整する力を育む

NEW!

新設された項目：

区分：1 健康の保持

項目：(4) 障害の特性の理解と
生活環境の調整に関すること。

この項目が意味すること：

- 自己の障害特性（例：感覚の過敏さ、認知の偏り）を理解する。
- その上で、学習や生活がしやすいように、自ら行動や感情を調整したり、他者に働きかけたりして環境を整える力を養う。

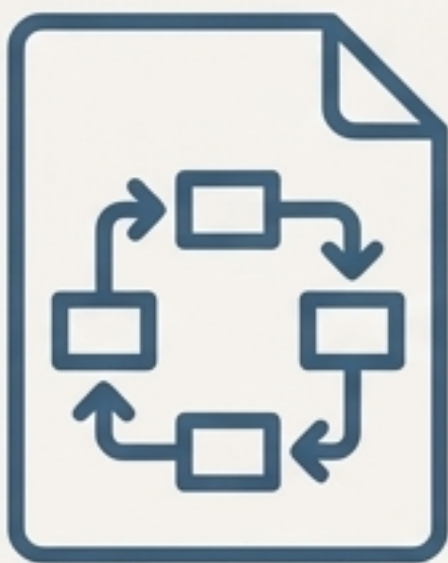


実践例：感覚が過敏な生徒が、教師に依頼してイヤーマフを使用したり、静かな場所に移動したりする。

結論：これは、子供を単なる支援の対象としてではなく、自らの困難を主体的に改善・克服する存在として捉える、ICFの理念を具体化した重要な改訂です。

具体的に、なにをすべきか？ (The WHAT)

実践の中核となるツール：個別の指導計画



個別の指導計画

- ＊自立活動の指導は、すべて「個別の指導計画」に基づいて行われます。
- ＊この計画は、一人ひとりの実態把握から評価・改善まで、指導の全プロセスを貫く設計図であり、組織的・継続的な指導の要です。

Plan - Do - Check - Action (PDCA) サイクルの確立

具体的に、なにをすべきか？ (The WHAT)

計画作成のプロセス：実態把握から指導内容の設定まで

「個別の指導計画」の作成は、以下の論理的なフローに沿って進められます。



具体的に、なにをすべきか？ (The WHAT)

プロセスの起点：子供の全体像を捉える (Step 1 & 2)

Step 1 実態把握 (Assessment)

- ・ 困難なことだけでなく、**長所や得意なこと、興味・関心**にも着目する。
- ・ 保護者や医療・福祉機関など、外部からの情報も積極的に収集する。

◆ 全体像

◆ 生育歴

◆ 生活環境

◆ 長所

Step 2 課題整理 (Identifying Issues)

- ・ 抽出した課題同士の**関連性**（原因と結果など）を分析する。
- ・ 「〇〇年後の姿」や卒業後を見据え、今取り組むべき**中心的な課題**は何かを焦点化する。

◆ 関連性

◆ 優先順位

◆ 長期的視点

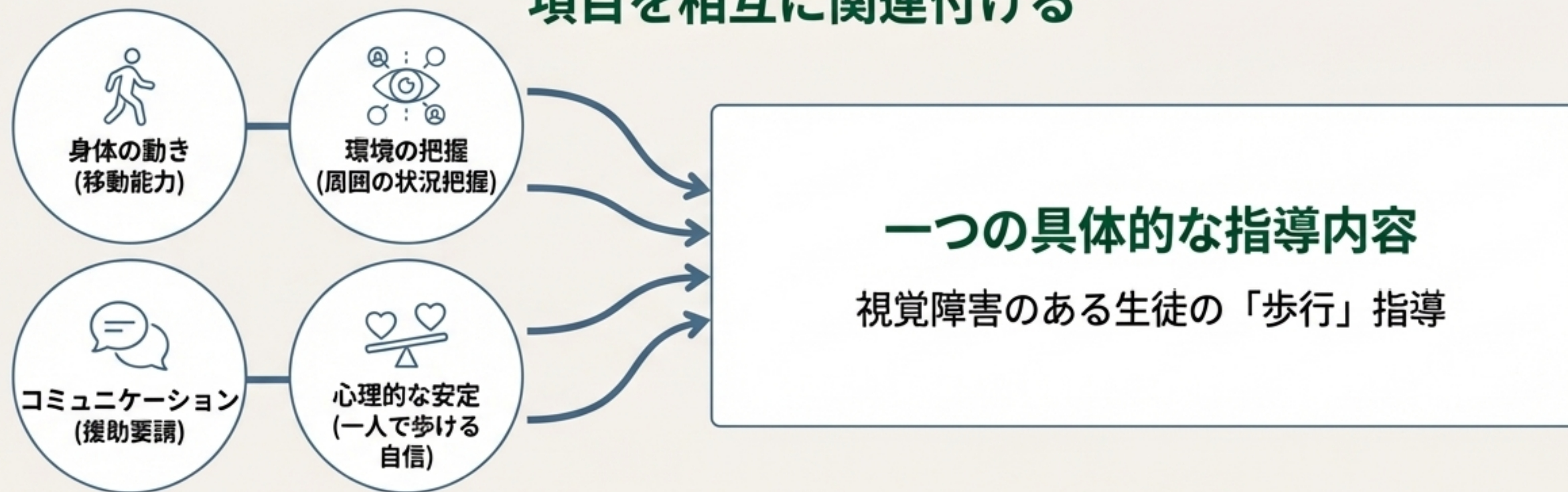
結論: "丁寧な実態把握と課題整理が、効果的な指導計画の土台となります。"

具体的に、なにをすべきか？ (The WHAT)

目標を形にする：ゴール設定と統合的な活動設計 (Step 3 & 4)

明確化された課題に基づき、長期的・短期的な指導目標を設定します。その目標を達成するための指導内容は、複数の区分を統合して設定することが極めて重要です。

項目を相互に関連付ける



結論: '一つの活動で多面的な課題にアプローチすることで、子供の全人的な発達を促します。'

具体的に、なにをすべきか？ (The WHAT)

事例で見るプロセス：聴覚障害のある高等部生徒の事例（図4）

卒業後、職場で円滑にコミュニケーションを図ることを目指す生徒の計画事例です。



実態と課題 (Assessment & Issues)

- 生徒：高等部3年生、重度難聴（補聴器装用）。口話は可能だが、早口になると不明瞭に。
- 課題：卒業後の職場でのコミュニケーションに強い不安を抱いている。
「聞こえる人たちがうまくやれるか不安」



指導目標 (Goal)

- 目標：職場で想定される場面に応じた言葉遣いや工夫を身に付け、自信と意欲をもつ。



具体的な指導内容 (Integrated Activities)

内容：複数の区分を関連付けて、以下の活動を設計。

[コミュニケーション] + [人間関係の形成]：職場の場面（報告・相談など）で用いられる表現（敬語など）のロールプレイ。

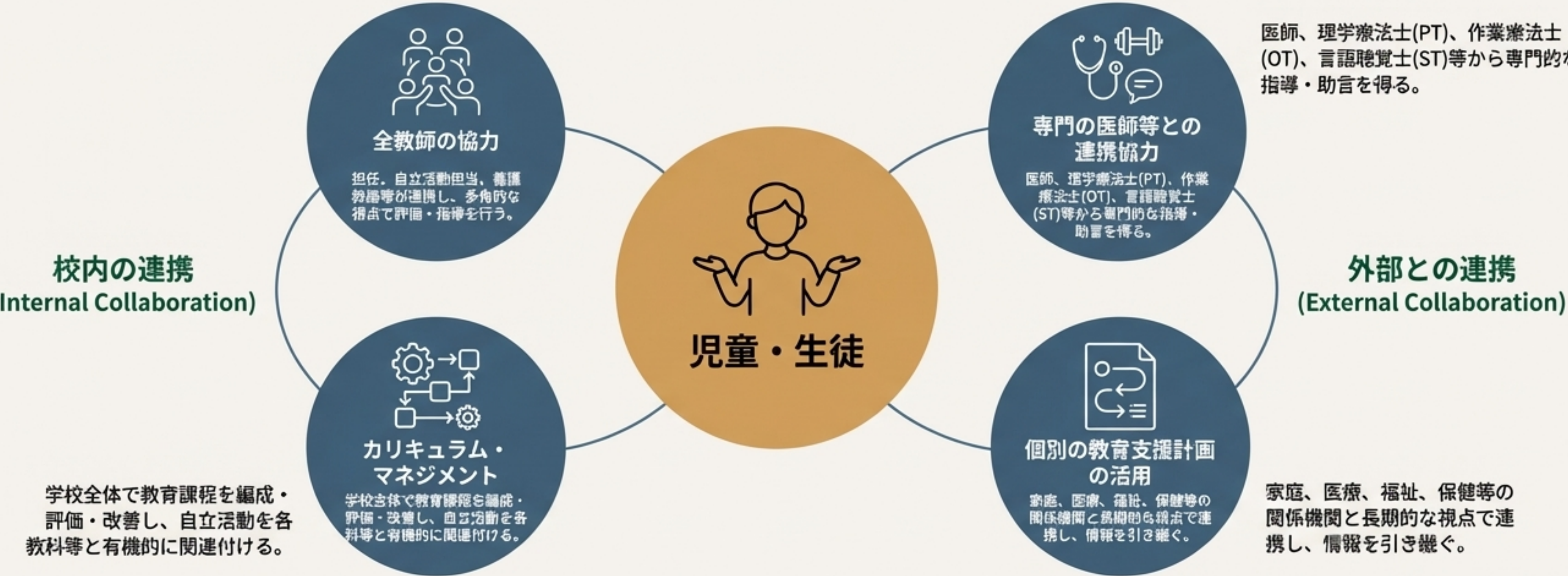
[環境の把握] + [コミュニケーション]：聴覚を活用し、伝わりやすい発音・発話の仕方を練習。

[健康の保持] + [心理的な安定]：自分の障害特性（伝わりやすさの違い）を理解し、不安を乗り越えるための工夫（筆談など）を考える。

具体的に、なにをすべきか？ (The WHAT)

成功のための協力体制：一人で抱え込まない支援のエコシステム

効果的な自立活動は、一人の教師の努力だけで成り立つものではありません。
学校全体、そして外部の専門家との連携が不可欠です。





一人ひとりの「生きる力」の基盤を築く

自立活動は、単なる指導領域ではありません。

それは、子供たちが障害による困難を主体的に乗り越え、自分らしく輝ける人生を築くための「心身の調和的発達の基盤」そのものを培う、私たちの最も重要な使命です。



自立
(Independence)



社会参加
(Social Participation)